

幕末明治の写真師列伝 第七十五回 武林盛一 その六

札幌史學會編『札幌沿革史』（札幌史學會、1897年）によれば、
「武林写真館ハ 明治五年五月ヲ以テ札幌ニ開業セリ
武林写真館ハ 明治四年以後ノ実景種板ヲ保存ス
武林写真館ハ 北海道山川原野海岸各所風景アリ
武林写真館ハ 土人写影及住家部落ノ真景各種アリ
武林写真館ハ 精巧ノ器械ト技術ノ練磨トニ依リ年来ノ高底ニ報
ンコトヲ期ス

札幌南三西一、七 武林写真館

という広告記事が掲載されており、この当時の武林写真館の宣伝抱負がこれで判る。

武林盛一の内弟子だった三島常盤は、明治12年（1879）、丸山まさたと結婚し、翌明治13年（1880）5月23日、この写真館内の五畳半の部屋で、三島常盤の長男、磐雄（後の武林夢想庵）は産れている。

明治14年（1881）、東京上野で第二回内国勸業博覧会が開催されると、武林盛一は3月の予定で初めて東京に視察に出かけた。この明治14年（1881）は、岡本圭三（二代目鈴木真一）がアメリカで写真修正術を学んで帰朝した年で、初代鈴木真一がそれに先立ち東京麹町飯田町二丁目五十三番地に、洋風の写真館（鈴木写真館九段坂支店）を建てて、岡本圭三（二代目鈴木真一）にその運営その他を任せていた。

岡本圭三（二代目鈴木真一）はアメリカから最新鋭の写真機を2つ持ち帰り、乾板による写真撮影をこの九段坂支店でもやり始める。また、岡本圭三（二代目鈴木真一）が米国サンフランシスコのテーバー写真館で学んだのは、湿板によるラパニックスニズで修正する新技術であったが、岡本圭三（二代目鈴木真一）の元にはこの新しい技術を学ぶために写真師仲間が次々と訪れ、また入門を希望する若者も多かった。

このような新技術を知って刺激を受けた武林盛一は東京移転についてよく考えるようになる。武林盛一とその妻、かねとの間には子供がいなかった。そのため、三島常盤の長男、磐雄が数えて4歳になった頃に、武林盛一は弟子の三島常盤に磐雄を養子に貰い受けたいと申し込むことにしたのだが、三島夫妻にすれば次男の昌司の方ならばともかく長男の磐雄ではとなかなか承知しなかった。またこの頃、塩谷村の戸長をしていた三島常盤の父、吉野民次郎も反対であった。それがどうしたことか、結局、武林盛一に口説き落されて、磐雄は武林盛一の養子となることに決まったのである。

明治17年（1884）11月、武林盛一は三島常盤には三ヶ月程の予定で東京見物に行くという話しをすると、武林夫婦はこの磐雄を連れて、小樽から横浜着の新型客船で東京に行くことになった。東京での第一夜の宿は馬喰町の刈豆屋という旅館であった。そして、武林盛一はそのまま札幌には戻らずに、翌明治18年（1885）3月頃に、東京麹町区一番町一番地に「さっぽろ・しゃしん・たけぼやし」と金文字横書きで三段に刷り出した看板を掲げた、小さな写真館を開業したのである。これは東京の写真材料商、浅沼藤吉の勧めによってといわれている。しかし、写真館を開業して初めの1、2年はさっぱり客が来ず、月8円の収入しかなかった。

この時、武林盛一は二見朝隈の弟子で、ちょうどこの頃年期を終えた大川孝を写真技師に迎えている。

武林盛一が東京に新しい写真館を開業すると同時に、年期の内弟

子として、日本橋元大阪町で開業していた写真師木津幸吉の養子、木津信吉（元は東京水道橋にあった松平頼寿伯爵邸内の金毘羅神社神職を代々務めていた和田家の三男、後に御茶ノ水の写真師気賀秋畝館主「玉翠館」の写真技師となった）と、横浜の三崎亀之助、長崎から上京してきた木津為政の3人が入門してきた。そして少し遅れて小樽の写真師佐久間範造（元湧谷藩藩士戸倉桑之丞）の甥、田中左一も内弟子となる。写真の修正技師としては鈴木という腕のいい修正技師を、浅草芝居町から通いで雇うことにした。また、修正技師として客分の千田竜太も入ってくる。

一方、札幌武林写真館の方は、武林盛一より三島常盤にその経営の一切を任せられることになった。これ以降、三島常盤は毎年、予算決算書を東京に居る武林盛一に報告し、札幌武林写真館の収入から利益、貸地貸家料などを武林盛一に送っている。

その後、写真館の客も徐々に増えて、特に政治家、ジャーナリストの島田三郎夫人は大川孝を最良にして3日にあげず、様々な服装で写真館に来てくれるようになった。この頃はウラジオストックから帰国した植村惣吉が大川孝の助手として写真撮影も行っていたが、植村は調腹な性格で客に頭を下げるのが嫌いで、とかく不遜な振る舞いが多く、武林盛一もそれを気にしていた。

ある日、この植村が島田三郎夫人を怒らせてしまい、島田三郎夫人はそれ以来、写真館に来なくなってしまった。武林盛一は植村に再三、お詫びに行ってくるように話したが、植村はどうしても詫びに行かなかった。そのため、植村はいつの間にか写真館から姿を消してしまっていた。

明治23年（1890）、武林盛一はそれまでの写真館（旧館）とは別にすぐ脇に新たに写真館を建て増して新館とし、大川孝夫妻の寝室、台所なども設けた。そしてこの新館が出来上がった機会に、写真館の営業に関する一切を、その年に結婚した大川孝に委ねることにした。ところが大川孝にはこの新館の経営が性格的に合わず、大川孝は1年もたたぬうちに武林写真館を出て独立したいと言い出した。これには武林盛一もいろいろと頭を悩ませたが、結局、浅沼藤吉とも相談の結果、大川孝の申し出を承諾して、武林盛一は独立の資本まで貸してやることにした。これにより大川孝は神田三崎町で写真館を新たに開業することになった。

大川孝が独立することになったので、武林盛一は九段坂の鈴木真一の弟子、今井直を入れて、この今井直を自分の養子とすることにした。この今井直、改め武林直を迎え入れる披露宴を新館奥のサロンで開催し、料理も御厩谷の東洋軒からコックとボーイも出張営業させて、盛り合わせの西洋料理を親族、来賓客、弟子たちに振る舞うことになった。この日の主賓は今井直の親元代りとして鈴木真一が来賓し、仲人役の浅沼藤吉、札幌から上京してきた三島常盤、麻布の写真館荒川高春方の技師をしていた津島力なども招かれて盛大に執り行われた。また、旧館と新館の境にあった門柱には、鳴鶴の書体で武林盛一、武林直と二人の名を連ねた表札が掲げられることになった。この頃の弟子としては、三崎亀之助はすでに辞めていて、木津為政、田中某の他に、京都朝日館吉田清七の息子、吉田某、日本橋の木津写真館から来た長谷川徳蔵、三丁目谷の俵屋の息子、尾崎某という弟子が増えていた。

（森重和雄）